

海外修学旅行におけるソーシャル・ネットワーキング・サービスの利用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00061871

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



海外修学旅行における ソーシャル・ネットワーキング・サービスの利用

金沢大学附属高等学校 72回生 2年次担任団

渡會 兼也, 荒納 郁美
金森 久貴, 室谷 洋樹

高等学校における海外修学旅行においてソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下、SNS）を利用した取り組みを報告する。2020年1月12日から17日まで実施された本校のシンガポール現地学習において、生徒117名と教員6名、添乗員1名、看護師1名からなるグループを構築し、旅行中の情報を共有した。結果、SNSが旅行中の連絡に役立つだけでなく、生徒の自由行動における安全確保に対しても有効であることが分かった。本稿では、教員と生徒のSNSの構築と自由行動における安全確保の取り組み中心に報告する。

キーワード：高等学校 修学旅行 SNS 安全確保

1. はじめに

平成30年度の全国公私立高等学校海外（国内）修学旅行・海外研修実施状況調査報告によれば、海外修学旅行は公立私立学校共に増加傾向にあり、全国で962校（公立440校、私立522校）が実施し、約17万人もの生徒が参加している[1]。学校におけるグローバル化は都市部と地方では状況が若干異なるが、今後の少子高齢化社会の中で、世界基準に対応できる人材の育成はどの学校においても喫緊の課題となっており、その第一歩としての海外修学旅行は重要な位置付けになっていると考えられる。近年、国連による2030年までに持続可能な開発目標（SDGs）の提示により、全国的にも全世界的にも個人がグローバルな世界の中で果たす役割について考える機会が増えている[2]。

海外修学旅行において最も重要な要素は旅行中の生徒の安全確保である。国土交通省観光庁が学校関係者向けに提供している「海外修学旅行マニュアル」には、旅行の具体的なフローだけでなく、安全

対策等にも多くのページが割かれている[3]。一方、海外修学旅行を通じて生徒に異文化を体験させ、意義のある教育活動を提供することも重要な要素である。特に、現地ガイドに従って観光地を巡るだけでなく、生徒の自主的な行動により現地の生活や文化・歴史に触れる経験が重要である。実施する意義があるがリスクを伴う活動をいかにデザインするかが海外修学旅行における鍵であるが、それは主催者である各学校と旅行会社に任されている。学校や旅行会社は、旅行中に生徒が事故や事件に巻き込まれる確率をゼロにはできないが、未然に防ぐための注意喚起や、事故に巻き込まれた際に、迅速な連絡が可能な方法・手段を事前に考える必要がある。

平成26年度の総務省による調査の時点で高校生の84.5%がスマートフォンを所持しており、その91%がソーシャルメディアを利用している。特にLINEの利用率は85.5%、Twitterが66.9%と高く、さらに書き込みをする割合もLINEが63.5%、Twitterが45.1%となっており、高校生はSNSを積極的に活用

していることがわかる[4]。ソーシャルメディアの使用目的として最も高い理由は、友達や知り合いとコミュニケーションを取るため(71.8%)であり、高校生にとって欠かせないツールとなっていることがうかがえる。これは5年前の調査結果であり、現状の社会情勢を考慮しても利用率が下がっていることはないと思われる。

本稿では海外修学旅行における自由行動の連絡にSNSを活用した実践を紹介する。本校では、2020年1月12日～1月17日の日程で本校の2年生117名の修学旅行(行き先はシンガポール)を実施した際、全行程を通じてSNSを利用した。事前にこのような取り組みがあるかを調べたが、生徒と教員が修学旅行でSNSを利用した報告例がなく、旅行会社の方にも聞いたところ、あまり例がなかったようなので本実践を報告することにした。本稿では特に、SNSの手法と自由行動におけるSNSの利用を中心に報告する。

2. 手法について

2.1 経緯

本校は平成22年～平成30年までの間、1年次の3月に海外現地学習と称した台湾への宿泊を伴う研修を行っていた。本校における修学旅行は、学習活動の一環であるという立場から、「現地学習」という言葉が使われている(本稿では、現地学習は修学旅行と同義とする)。令和元年度は現地学習の行き先をシンガポールへと変更した。その理由は2つある。1つ目は、本校が進める地球サイズの教育を実行するために、生徒が英語を利用する機会を提供すること。2つ目は、多民族国家であるシンガポールの文化に触れ、グローバルな感覚を養うことである。本校にとって初めてのシンガポール現地学習であり、様々な検討をしながら準備をしたが、生徒の危機管理を考えた際に、最も重要なことは「情報の共有」であると考えた。教員と生徒の「情報の共有」を行

うネットワークの構築によって、事前のリスク回避やトラブルが起きた際に情報収集が可能となる。

学校における安全なSNS環境の整備には、生徒個人に学校側がメールアドレスを付与することが必要になる。本校は2018年夏に、母体である金沢大学に本校生徒にも学内ネットワークを使用できるようはたらきかけた結果、今年度から生徒が学内ネットワークにアクセス可能となり、同時に生徒個人のメールアドレスも付与された。生徒が個人のメールアドレスを持つことにより、教員側で学外のSNS等の登録も可能になった。

2.2 Slackについて

Slackは、2019年9月時点で1200万人以上のユーザーが利用しており、世界で150か国以上が利用しているSNSアプリケーションである[5]。チャット形式のコミュニケーションが中心だが、ファイルの交換や音声通話も可能である。スマートフォン向けのアプリだけでなく、タブレット端末やPC用のソフトウェアも用意されており、ネットワークに接続・同期することで、端末に依存しない使い方ができる。Slackは他のSNSサービスと異なり、広告がほとんどなく、ビジネス利用のためのユーザーが増えている。

使い方を簡単に説明する。「ワークスペース」という大きなカテゴリで利用メンバーを全員登録し、部署やプロジェクトごとに「チャンネル」(プライベートチャンネル)を作ることで、限定されたメンバー内での情報共有が可能になる。Slackには無料版と有料版がある。無料サービスではメッセージ数が10000件を超えると古いものから削除される、ストレージ容量が最大5GBなど機能に制限が付いている。投稿したメッセージは投稿者が削除可能で、SNS上にも残らないことも特徴として挙げておく。詳細な利用方法については、Slackのウェブサイトを参照されたい[5]。

今回我々は修学旅行のために「72回生シンガポール現地学習」というワークスペースを作り、そこに引率教員6名と生徒117名、旅行会社の添乗員1名、看護師（派遣）1名を登録した。具体的な方法としては、生徒が金沢大学IDで取得したメールアドレス宛に管理者がワークスペースへの案内メールを送り、メールを受け取った生徒がネットにアクセスして登録した。教員はチャット形式での会話機能を主に使ったが、インターネット回線を利用した無料通話も何回か使用した。



図1 Slackのメイン画面。グループ内チャット形式がコミュニケーションの中心。



図2 チャット部分の拡大画面。教員からの連絡事項を掲載している。

2.3 Slackを選択した理由：LINEとの違い

LINEは日本国内で8200万人（2019年10月時点）がアカウント登録をしており、その普及率と利便性から幅広い年齢層に利用されている。多くの教員はLINEを利用しており、グループ機能を使えば簡単に生徒と教員のためのチャンネルを開設できる。た

だし、LINEはIDを設定する際に様々な個人情報が紐付けされており、設定を変更せずに利用すると「繋がりがたくない人」に個人情報が流出するリスクがある。プライベートなLINEのIDを仕事に使用することに抵抗感がある教員・生徒も少なくない。

また、LINEはメンバーがメッセージを見た際に「既読」マークが付くことによる負の側面や、メッセージの修正が不可能なために、ストレスの原因となる問題を抱えている [6, 7, 8]。生徒の中には、個人情報のリスクを認識しながらも、グループに加入することによる利点やグループに参加しないことの影響を考え、仕方なく参加している者もいる。

Slackは生徒の金沢大学ID（学校用メールアドレス）を利用して登録するので、生徒が自らプロフィールなどを公開しない限り、メールアドレス以上の個人情報が流出する危険が少ない。また、既読機能はなく、投稿者がメッセージを削除すればSNS上でも削除されるため、使用する上での緊張感はLINEに比べて低いと思われる。本校では、2018年度から教員間の情報共有や連絡のためにSlackを利用している実績があり、教員が使い方を理解していることもSlackを選択した大きな理由の一つである。

3. 現地学習での実施について

シンガポール現地学習は本校の72回生（2年生）が2020年1月12日～1月17日の行程で実施した。この章では現地学習での利用について述べる。

3.1 事前準備

生徒には旅行前にSlackを利用して連絡を取ることをアナウンスした。それに伴い①現地で利用可能なFree Wi-Fiスポットを調査しておく、②モバイルWi-Fiルータを班で1台持つ、の2つを依頼した。海外におけるローミングは従量課金制に基づいており、知らずに利用すると帰国後に莫大な利用料を請求される。Wi-Fi接続によるネット電話の回線が不

安定な場合もあるが、一旦ネットに接続できれば、通信料を気にすることなく利用できる。今回の旅行（5泊6日程度）では、通信量が100GB/日のルータが1台あたり6000円～7000円程度である。班の中で、個人的にルータを持って参加した生徒もいれば、協同でレンタルし、お金を折半した生徒もいた。Wi-Fiルータは学校で準備することも考えたが、通信量を多く消費する人とほとんど消費しない人との間に不公平感が生じる可能性がある。また、ルータにトラブルがあった場合の対応が煩雑になるため、生徒個人での対応をお願いした。

3.2 団体行動でのSNSの利用

1月12日～15日までは基本的に団体行動であったが、時折、短時間の自由時間があったため、連絡事項の伝達にSlackを利用した。現地では多くの生徒を集合させて伝達するようなスペースが少ない。Slackを利用が連絡事項の確認や急な時間変更の連絡に役立ったと思われる（図2参照）。

15日に生徒全員が国境を越え、マレーシアの村に入村体験を行う活動があった。往路は問題なかったが、復路の国境通過に非常に時間がかかった。その際にも、誰がゲートを通過していないか、何が原因で時間がかかっているかという情報を教員が共有したことで安心して過ごす（待つ）ことが出来た。

3.3 自由行動でのSNSの利用

1月16日の9:00～16:45に班別自由行動の時間を設けた。自由行動班は22班あり、1班あたり4人以上7人以下で構成されている。自由行動における行動予定は事前に提出させ、PDFファイルをSlackにアップロードした。自由行動のプランニングの際には、日本においても危険があるアクティビティは避けるように指導した（マリンスポーツやバンジージャンプなどのアクティビティは、日本でも事前許可が必要）。それ以外は自由な行動プランを立てさ

せている。安全を確保しつつ、自由な活動を求めたが、生徒はうまく調整してくれた。自由行動当日で我々が生徒に求めたのは、「午前と午後に少なくとも1回、現地のコメントと班員全員が写った写真をSlackにアップロードする」ということである。

自由行動当日は引率教員を、①ホテルに待機し、緊急時に対処、②ホテル近くの繁華街に待機、③観光地を巡る、の3つに役割に分けた。SNSのチェックは主にクラス担任が担当した。チェックポイントに教員を配置し、そこを必ず通ることを要求する方法も考えたが、自由行動のルートが多様で、自由行動の趣旨に反するため、その方法はやめた。

自由行動が始まると、早速生徒から写真が送られてきた。どの班がどの場所にいるかが分かるだけでなく、生徒の表情も見える。普段から少し気になる生徒の楽しそうな表情に安堵する。投稿された写真は他の班にも共有され、触発された他の班も次々に写真を投稿する。中には、多少ふざけた写真も投稿されるが高校生らしいもの、倫理的に問題があるもの以外には目をつぶる。また、初めての場所で、予定の時間通りにいかなかった班が計画の修正を連絡してきた。地下鉄の代わりにタクシーを利用し、タクシーの運転手との写真を送ってきた（図3右）。変更があってもこのような連絡があれば安心である。また、午前中に写真の投稿が遅くなった班があった。教員がSNS上で「xx班から連絡がありません。xx班の班員と連絡がとれる人がいたら連絡をお願いします」とコメントした（図4左）。しばらくすると謝罪のコメント付きで、教員側に連絡があった。午前中にすべての班の無事が確認でき、教員も安心して昼食休憩をとることができた。午後、生徒が自主的に写真をアップロードし、それぞれの班が訪問した場所の情報を共有した。中には現地の店員さんとの写真を投稿した班もあった（図4右）。自由時間の終盤には集合時刻に間に合わないかもしれない、という連絡もあったが、実際にはすべての班が

集合時刻に間に合った。

我々の感覚からすると、チェックポイントを設けることや途中で電話をさせるよりも情報量が多く、生徒の行動が把握できていると感じた。何よりも生徒の楽しそうな写真がリアルタイムで見られることが嬉しかった。



図3 Slackに投稿された写真1



図4 Slackに投稿された写真2

4. アンケートの分析

事後に現地学習のアンケートを行った。その中で、今回のSlackを利用した試みに対する以下の質問項目を分析した。

Q Slackと呼ばれるソーシャル・ネットワーキング・サービスを利用して情報の共有を行いました。あなたの状況を教えてください。

図5によれば、実際にSlackを利用した生徒は全体の69%、不利用は26%であった（未回答が5%）。これは全員でなくても、ホテルでの2名1室でどちらかがインストールすれば良いと指示したと思われる。旅行の大部分は団体行動であるため、友人のアプリを見せてもらうことで用が足りたようである。特に問題はないと考えている。しかし、理想は生徒全員がアプリをインストールし、情報を共有や教員と連絡を取れる体制が望ましい。

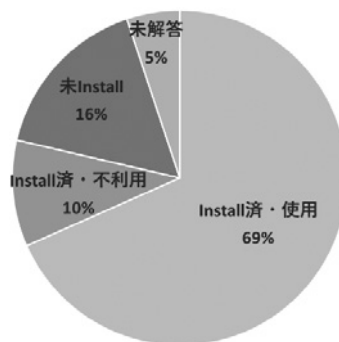


図5 Slackの使用割合。スマートフォン用のSlackアプリをInstall済・使用が80人（69%）、Install済で不利用が12人（10%）、インストールせず19人（16%）、未解答6人（5%）。合計117人。

図6は、記述意見をネガティブ・ポジティブ・中立の3つに分類したものである。一人一人の記述を読み、明らかにポジティブな意見（良かった、便利だった、等の語を使用）、明らかにネガティブな意見（良くなかった、不便だった、等の語を使用）、判別できないもの（ポジティブ・ネガティブ両方を書いた記述を含む）を中立とした。テキストマイニングによるネガティブ・ポジティブ分析も検討したが、自由記述の場合、ネガティブな記述にはネガティブな語が多く使用される傾向があるため、人の目で判定することとした。

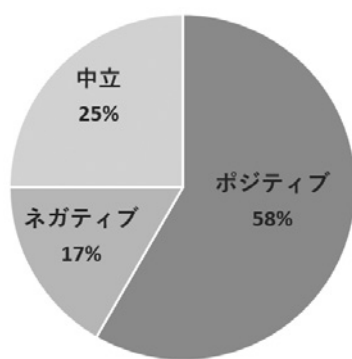


図6 記述意見のネガティブ・ポジティブ解析

生徒の挙げたポジティブな意見(58%)としては、情報伝達の利点を挙げた生徒が32.4% (38名)いた。具体的な文章としては、「全体への連絡事項が手元に残ることで時間の確認ができた。」「写真の共有が楽しい。」「場所情報の共有。」「自分達が行く予定の場所を事前に訪れた班の写真やコメント等でイメージすることができる。」「予定の変更を伝えることができてよかった。」等が挙げられていた。

逆にネガティブな意見(17%)の大半は、Wi-Fi環境についての不満10.2% (12名)であった。具体的には「Free Wi-Fiへの接続トラブル」や「LINEで画像の送信ができたがSlackでは送信できなかった」等の意見があった。ただ、これはSlackの不満ではなく、通信環境の問題である。そもそもSNSアプリの利用自体が面倒である、という生徒も一定数存在した。

中立の意見には、ポジティブな意見とネガティブな意見を両方書いたものが幾つかあったが、詳細は6章で取り上げる。

LINEで良かったのではないかと記述が6名あった。LINEを利用しない理由は2章に記載したが、LINEと同じ機能なのに、新たにダウンロードしなければならないのか、と記述した生徒がいた。旅行前の集会で伝えたが、なぜSLACKを導入するか、をもう少し丁寧に説明すべきであった。

5. Slackアナリティクス

Slackの管理者はアナリティクスというページで、ワークスペース内のトラフィックを分析できる。ここでは分析を2例紹介する。

図7は、現地学習の前後2週間程度のメンバー数の時間変化を表す。12月24日に引率教員と試験的に数名の生徒を登録し、年明けの1月7日にアナウンスをした結果、メンバー数が急激に増加し、参加者が100人を超えた。日間アクティブメンバー数は、実際にアプリを開いて、メッセージを見た人数である。現地学習2日前からも教員の連絡等があり、多くのメンバーがアクティブになっていることがわかる。現地学習後の21日に再び増加しているが、これは現地学習での写真をSlackへ投稿してほしい、という依頼をしたため、大量の画像が投稿され、多くのメンバーが閲覧したためである。メッセージを投稿した人数は、10～20人程度である。この数には画像だけを投稿した数は含まれていない。

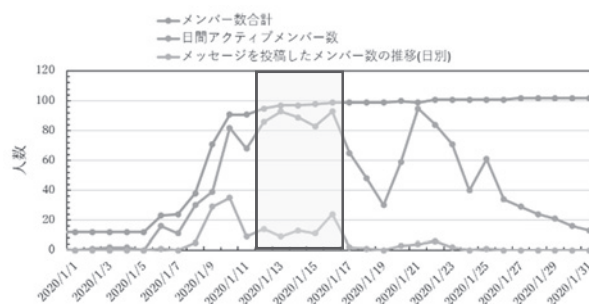


図7 ワークスペースに参加したメンバー数の推移

図8は、チャンネル毎に投稿されたメッセージ数を表す。パブリックチャンネルは、連絡事項のためのチャンネルに相当し、12日～15日は1日あたり20件程度であるが16日の自由行動時は70件近いメッセージ数になった。プライベートチャンネルは、教員連絡用のチャンネルで現地での教員の行動予定や打ち合わせが含まれているが、1日あたり10件以下であった。ダイレクトメッセージは、メンバーの個人間でのメッセージ交換であり、旅行前日の11日に

ピークがある。これは生徒が教員に対して疑問や質問（荷物や向こうでの予定の問い合わせ等）をダイレクトメッセージで送ってきたためと考えられる。

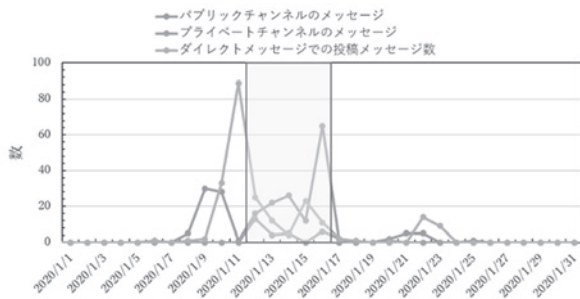


図8 メッセージ数の推移

6. 考察

自由行動における安全確保として可能な方法の1つが、生徒の位置情報の取得である。笠原ら（2013）は国内修学旅行においてスマートフォンやタブレット端末のGPS機能を利用した追跡実験を行っており、彼ら研究はそのまま海外での修学旅行に転用できる[9]。しかし、スマートフォンのGPS機能を利用することで、生徒が他の情報リスクにさらされる可能性もある。また、スマホのカメラで撮影する際に写真の位置情報を付記する機能もあり、それを利用することも考えられるが、SNSの投稿画像から位置を特定され、ストーカー被害に会ったというニュースも報道されている。アプリにGPS機能の利用が明示されていれば、自然に利用できるかもしれない。ただし、生徒には制限された通信量の中でアプリのインストールを嫌う生徒も少なくない。本当に大災害やテロに見舞われたときには、そもそもインターネットによる通信もダウンする可能性がある。ただ、その際にも生徒の手元にはSNSにアップロードされた情報が残っており、それが役立つかもしれない。

SNSの利用に関しては、Slackにおいても多少の不満意見があった。何件かの投稿が、一部の生徒だけに通用する内輪ネタであり、それを見ていて不満に感じた生徒もいた。例えば、高校生のSNS疲れを

調査研究によれば、SNSを発信している人だけでなく、受信している人も、同意できない情報に対するストレスや、同調圧力などを感じている[6, 7, 8]。だからと言って、SNSを抜けることで、既存の関係に影響があることも懸念される。LINEの所謂「既読スルー」によるストレスや、関係のない情報に対するストレスも、SNSを利用する以上は避けられない（実際に、この種類のコメントが数件あった）。ただ、今回のメンバーには教員も入っており、無意味な投稿などが抑制されていたと思われる。また、Slackは記事の削除が可能であるため、潜在的なトラブルが避けられていた可能性がある。

海外修学旅行は年々増加傾向にあるが、生徒の安全をどう確保すべきであろうか。安全を重視し、全行程を教員が引率するプランでは、教員は安心できるが生徒の自主性が育たない。一方、何も管理をせずに生徒の自主性に任せたプランでは、トラブルに巻き込まれた際のリスク管理が出来ない。おそらく、各学校で行われている実践例を共有していくことが必要であろう。

今回紹介したような形でスマホを利用する際は、学校生活におけるスマホの指導も再考すべきだろう。授業中の使用は駄目だとしても、日常的な連絡ツールとしてスマホとSNSは欠かせないものになっており、学校においても適切な利用を考えさせる必要がある。高校生のインターネット利用の殆どはスマホによるものであり、日常的なインターネットの過剰利用が、インターネット依存を引き起こし、精神的健康に影響を及ぼすことが示されている一方で、インターネット利用頻度が高い生徒がメールやSNSを通じて、友人関係の適応感を高めている可能性も示唆されている[10]。現代社会は、スマホの利用が求められる社会、スマホを利用することで便利になる社会に変化している。学校現場はスマホやSNSの負の側面と向き合いながら、正の側面を伸ばしていく必要があるだろう。

教員の情報通信リテラシーも課題である。フリーWi-Fi接続の際のリスクやSNSのリスクを正しく理解し、適切に利用するすべを教員も学ばなければならない時代である。初任者研修や中堅教員研修、あるいは教員免許更新制度等を通じて、ネットワークの仕組みやSNS利用について、教員が学ぶ機会を提供しても良いのではなかろうか。今後の生活のためにICT技術をどう使うかを生徒とともに考えるべきではないかと思う。

7. まとめ

海外修学旅行におけるSNSの利用について報告した。SNSを利用することで、以前私が引率した海外修学旅行よりもリスク管理のレベルは飛躍的に向上し、同時に引率教員の心配・不安の軽減にも繋がったと感じている。海外修学旅行における安全確保の具体的な事例報告が少ない。この実践報告が他校での旅行に貢献できれば幸いである。

追記

本校のシンガポール現地学習が終了した直後に新型コロナウイルスによる感染が日本においても拡大し、多くの学校における修学旅行が縮小・中止になった。今回の実践例は当面の間は役に立たないかもしれないが、感染が収束した際には有用な情報であると考え、記録に残すことにした。

謝辞

本稿の作成にあたり、助言をいただいた元和歌山大学観光学部の中串孝志氏に感謝する。また、シンガポール現地学習に参加した72回生生徒の協力に感謝する。

参考文献

[1] 平成30年度 全国公私立高等学校海外（国内）修学旅行・海外研修実施状況調査，公益財団法人

- 全国修学旅行研究協会，
<http://shugakuryoko.com/chosa/kaigai/>
- [2] 国連のSDGsのページ
<https://www.un.org/sustainabledevelopment/>
- [3] 海外修学旅行マニュアル，国土交通省観光庁，
https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/sangyou/shugakuryoko_manual.html
- [4] 高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査，平成26年度総務省情報通信政策研究所
- [5] Slackのウェブページ
<https://slack.com/intl/ja-jp/>
- [6] 「SNS疲れ」につながるネガティブ経験の実態，加藤千枝，社会情報学，2013，2(1)，31-43
- [7] SNS疲れにつながるネガティブ経験の実態，中尾陽子，人間関係研究（南山大学人間関係研究センター紀要），16，53-68
- [8] 高校生の友人関係とSNS利用に伴うネガティブ経験，中山満子，科学・技術研究 第7巻2号，2018年
- [9] 「位置情報に基づく修学旅行支援」 笠原秀一，森幹彦，椋木雅之，美濃導彦 システム/制御/情報 Vol.57, No.8, pp.342-347, 2013
- [10] 高校生のインターネット利用行動とインターネット依存，精神的健康の関係，岡安孝弘，明治大学心理社会学研究 第12号，p17-p30, 2016年